

大正教養主義への反発

— 唐木順三『新版現代史への試み』 —

唐木順三さん(以下、敬称略)著作は私の愛読書で『無用者の系譜』『中世の文学』を紹介したいと思っていたが、今回は『現代史への試み』を取り上げた。奥付に74年2月6日読了とあり、卒業直前にこの本を読んでいたらしいが、そのへんの事情は思い出せない。(菊地実)

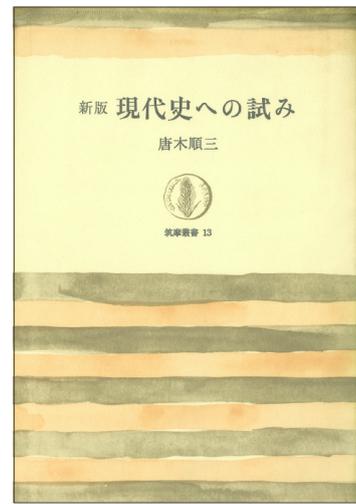
精神史へのアプローチ

唐木順三著作には①森鷗外・永井荷風②中世近世文学③哲学・社会時評三つの系譜があり、筑摩書房共同設立者の顔もある。全著作は日本人精神史と言えよう。よく神保町でお見かけし、私の上司達は挨拶をしていた。どこでも気難しい顔で昼間からビール(ランチョン)できこしめした吉田健一とは好一対だった。

『新版現代史への試み』はサブタイトルに<型と個性と実存>とあり、冒頭の文章に「大正六・七年は日本にとってのみならず、世界にとっても非常な年だった」(5頁)。昭和二十四年に出された本書はロシア革命・第二次世界大戦と実存主義が色濃い。1980年代末、冷戦終結で<大きな物語の終焉>。経済IT一辺倒になった今日から見ると大きな落差を感じる。しかし日露戦争時に生まれ大正教養主義時代に育った唐木にとって、ロシア革命・敗戦と戦後の社会混乱は大きく重いテーマだったことは言うまでもない。

<図表1>本書の構成

現代史への試み	昭和24年3月刊
近代日本の思想文化	昭和32年5月刊
近代と現代	『現代史への試み』
自殺について	昭和25年7月刊
教養ということ	昭和25年11月刊
虚構も魔術化	同上
残るもの	同上
途中の喪失	昭和35年5月刊
新しい幸福論のために	同上



<筑摩叢書>

大正教養主義への反発

旧制高等学校(現在の大学教養学部)学生の愛読書ベストセラー阿部次郎『三太郎の日記』*1に対する批判は激烈で、「この著者は社会的大変動期の時期において、自分の懐具合や雑誌記者の催促以外は、目をつぶって」(29頁)と珍しく揚げ足取り批判。「明治維新前後に生れ、幼児に四書五経の素読を受けたジェネレーション・・・すなわち鷗外、漱石、露伴、二葉亭、内村鑑三、西田幾太郎。そうしてその最後の型としての永井荷風・・・。明治二十年前後に生まれた右の先達の門下との間には明確な一線が」(35頁)としている。のちに自殺論でも、軍人達にもそれがあることを唐木は指摘している。そういえば近代教育は人間を軽薄にしたという批判も一般的だ。幕末から明治維新に生まれた著名人、南方熊楠、牧野富太郎、内藤湖南、鈴木貫太郎などを見

るとジャンルに関係なくスケールが大きいと感ずる。特に南方の和漢洋三宗の水準は驚かされる。

教養／落ちた偶像

しかしながら唐木説は所詮世代論ではないかという疑問も出てくる。四十年上は型があり二十年上は「大正の教養は自らの手で古典を選んだ・・・バイブルもホイットマンもモーパッサンも教養だった」(26頁要約)。さらに唐木はマシュー・アーノルドの『教養と無秩序』*2を引用する<図表2>。十九世紀自由主義を基調とした教養人が二十世紀、第一次世界大戦とロシア革命後に日本で出現したことを「意識的に、国家、民族、政治、経済、すなわち経世済民を軽蔑・・・それを黙殺する文化主義・・・日本の特殊的現象と言わねばならない」(27頁)としている。さらに歴史的には「教養が俗物中の俗物化したのは・・・十九世紀後半で小市民的書齋的なものとなり外部と内面生活が切り離され、進退的行為的なものを失って」(50頁)という指摘は重要である。出版史研究でも古典音読(『四書五経』の素読)から黙読への変化が読書や人間形成に大きな影響を与えているという論が定説。さらに唐木は大正十五年の木下杢太郎講演を援用している*3。

昭和二十七年に書かれた『教養といふこと』でも「明治時代の日本には教養という通念はなかった。教養は大正末以来のもので」(234頁)とダメ出し。

帝大・高等学校・陸大

ただ唐木の射程に入らない事象がある。唐木が論ずる人物は旧制高校・帝大さらに士官学校陸大といったわずか数%のエリート層である。明治末から大正にかけて発展した講談社・実業之日本社に代表される価値は新しい立身出世だ。それは<末は博士か大臣か>という大げさなものではなく、実務的成功を目指した世代階層である(文化生活・文化住宅)。資本主義が定着し都市生活拡大する中で求められたのは実用的知識と娯

<図表2>『教養と無秩序』

貴族階級	優美、叡智を持たない野蛮人
中流階級	自己満足の俗人
教養人	識者、型を持たない個人的自由主義
労働階級	判断力を持たず、付和雷同

(本書P26より)

楽としての物語である。多くの大衆小説・ユーモア小説・冒険活劇さらには荒唐無稽な立川文庫などが挙げられる。

さらに江戸時代からの流れを組む短歌俳句さらに好事家を中心とした著作が挙げられる。現在の観点で読むと気張った自然主義や白樺派よりはるかに息が長い。

哲学の徒

唐木の教養批判は竹内洋の教育社会学に受け継がれさらに高田里恵子教授『文学部を巡る病』によると、本書は「教養主義批判の古典であり再批判のためには・・・」とそれなりに評価されている

戦後論壇への批評一坂口安吾『墮落論』や花田清輝など懐かしい名前が同時代に、丁々発止されている様も面白い。また戦犯と北村透谷に始まる『自殺論』は力作である。

唐木の論は恩師西田幾太郎や学友の三木清に甘いという感じもするがそれはさておき、晩年まで核兵器を作った物理学者批判をしていた*4。

あの、真面目な顔が思い出される。

*1:『三太郎の日記』1914/大正3年東雲堂出版。増補合本1918年岩波書店、戦後は角川選書・角川文庫。東北大学美学教授阿部次郎の新聞雑誌発表論文エッセイをまとめたもの。戦前戦後もベストセラーになったが、私にはちっとも分からなかった。筆者阿部次郎と岩波・角川の出版人との交流は出版史としても興味深い。

*2:マシュー・アーノルド『教養と無秩序』(岩波文庫1965年刊・多田英次訳)

*3:漢字制限批判で文化の為にならないとしている。

*4:『科学者の社会的責任』1980年